

〈研究ノート〉

ボランティアコーディネートをつうじた 中山間地域再生の可能性

——ひきみボランティア活動支援事業を事例として——

橋 本 文 子

藤 本 穰 彦

はじめに

1. 匹見町とひきみボランティア活動支援事業の概要
 - (1) 匹見町の概要
 - (2) ひきみボランティア制度の流れ
 - (3) ボランティアの実施内容と会員
2. 島根県立大学との連携
3. 匹見町ボランティア実践のケーススタディ
 - (1) 【集落支援、作業支援】 道川地区元組自治会における環境整備活動（2010年4月23日、6月20日）
 - (2) 【田舎体験支援、団体支援】 匹見峡春まつり（2010年5月3日）
 - (3) 【田舎体験支援】 「田中学習会」 田舎体験学習旅行（2010年8月17～18日）
 - (4) 【集落支援、イベント支援】 内谷集落・「とちの実交流会」（2009年12月9日）
 - (5) ボランティアからインターンへ
 - (6) 地域の期待・ボランティアの期待
4. むすびにかえて——自立志向・未来志向の中山間地域をめざして

はじめに

過疎・高齢化が進む中山間地域の小規模・高齢化が進む集落に暮らす人々の「生（生命、生活、人生等）」をいかに下支えしうるのであるのか、豊かな自然資源をいかにして活用しつつ維持し、次の世代へと受け渡せるか等、中山間地域の危機が静かに進行している。

根本的な課題は農林、福祉等様々な分野での担い手不在問題であると筆者（藤本）は考えている。中山間地域の担い手不在問題へのアプローチとして、これまでに、①「楽しむ」で地域とつながるといふコンセプトのもと、地域のファンを増やし、ネットワーク化すること、②地域外の人々を地域に招き入れ、生まれた場所や育った場所に関係なく、地域の住民とともに地域や土地と出会いなおし、「住みなおす」きっかけづくりと支援をするコーディネーターを配置することを検討してきた（藤本，2010b）。なかでも、ボランティア・大学生の可能性に注目している（藤本・田中・平石，2010）。本稿はこれまでの研究を、継続的に展開するものである。

本稿では、益田市匹見町で実施されているボランティア支援制度を事例として検討したい¹⁾。筆者（藤本）は、2009年12月より、匹見町まちづくりコーディネーターの石橋留美子氏²⁾と協働し、活動支援をつうじた実態把握調査を行なう等、協働実践にもとづいた意見交換を繰り返してきた。表1は筆者（藤本、橋本）がこれまで参加してきた匹見町でのボランティア、田舎体験活動一覧である。11回の田舎体験・イベント・ボランティア参加に加え、石橋氏と個別の意見交換の機会を4回持ってきた³⁾。特に、2010年4月以降は、筆者（橋本）を中心に、鳥根県立大学との連携を深める等、持続的な仕組みの構築にむけた実践を強化してきた。

表1 匹見町でのボランティア、田舎体験等参加実績

年	月	日	内容	事項	参加者
2009	12	9	ボランティア	とちの実交流会・「小学生体験」イベント活動支援	藤本・平石
2010	1	27	イベント	匹見上公民館・真冬の匹見カマクラ体験	藤本・平石
	3	20	田舎体験	三葛地区・ワサビイベント	藤本・平石・橋本
	4	18	イベント	安蔵寺山登山	藤本・橋本
		23	ボランティア	道川地区元組集落・集会場周辺整備	橋本
	5	3	ボランティア	匹見峡春まつり支援	藤本・橋本
	6	4	ボランティア	萬葉の郷・周辺整備	橋本
		5	田舎体験	内谷集落・ワサビイベント	橋本
		20	ボランティア	道川地区元組集落・側溝清掃	橋本
	7	24	田舎体験	広瀬山菜グループ・川遊びイベント	橋本
	8	17～18	ボランティア	田中学習会「田舎体験学習旅行」支援	橋本

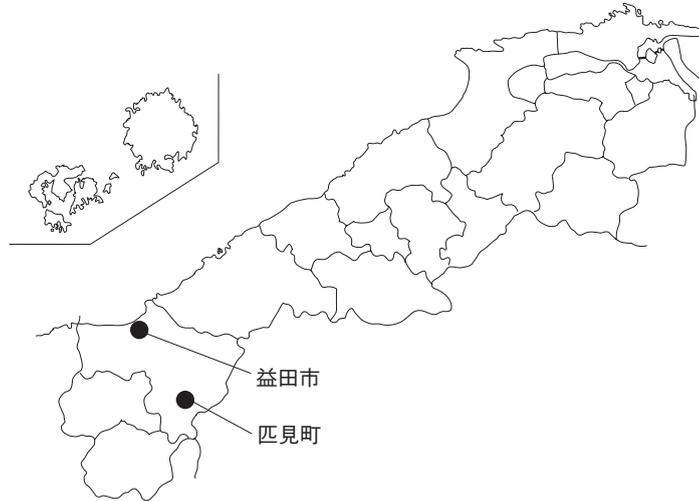
以下ではまず、匹見町とひきみボランティア支援制度の概要を示し（第1節）、鳥根県立大学との連携可能性について考える（第2節）。そのうえで、匹見町でのボランティア活動支援事業の実践例について詳細に検討する（第3節）。

1. 匹見町とひきみボランティア活動支援事業の概要

(1) 匹見町の概要

図1は匹見町の位置を示したものである。益田市街地までは約40キロメートルの距離にあり、自家用車で約50分、公共バスを使用すると約74分で、一日に5往復の便がある（石見交通バス 匹見線：益田駅－匹見上間を使用）。広島県、山口県と県境を接する西中国山地に位置し、総面積は300.08平方キロメートルで、約97パーセントを山林が占める。

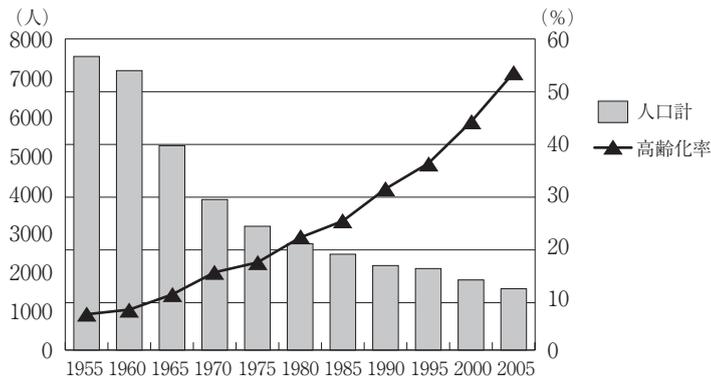
図1 匹見町の位置



1955年2月に匹見上村、匹見下村、道川村の三村が合併して匹見村となり、1956年4月、町制施行により美濃郡匹見町が誕生した。その後、「平成の大合併」では、2003年2月28日に「益田市・美都町・匹見町合併協議会」（法定協議会）が発足。数十回にわたる協議の末、一市二町（匹見町、美都町、益田市）の合併が決まり、2004年11月1日に現在の益田市匹見町となった（匹見町誌編纂委員会編, 2007:833-846頁, 881頁）。

図2は匹見町の人口動態と高齢化率の推移を示したものである。2010年8月末現在、人口は1,477人で、高齢化率は53.6パーセントである。1955年の7,550人をピークに、減少を続けている。1960年には1,688あった世帯数も、2000年にはその半分以下の806世帯にまで減った（国勢調査にもとづく）。

図2 匹見町の人口動態と高齢化率の推移

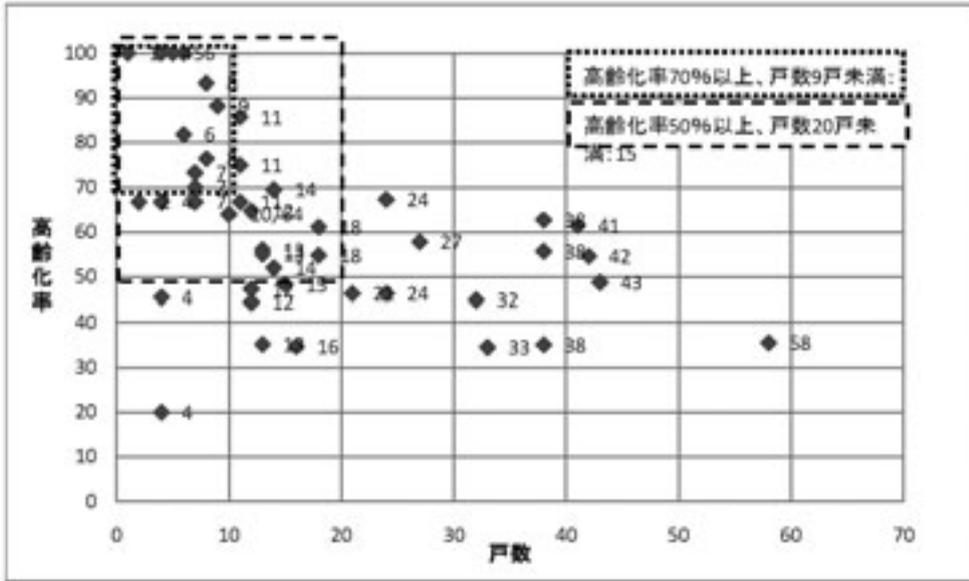


出典：国勢調査をもとに作成

次に、図3は、匹見町における集落の現状を示したものである。全46集落（自治会）のうち、高齢化率50パーセント以上で戸数20戸未満の集落が15集落、高齢化率70パーセン

ト以上で戸数9戸未満の集落が11集落あり、集落の小規模高齢化が進んでいる。さらに詳細に検討してみると、高齢化率100パーセントの集落が4集落あり、戸数はそれぞれ、1、4、5、6戸である⁴⁾。

図3 集落の小規模・高齢化の現状

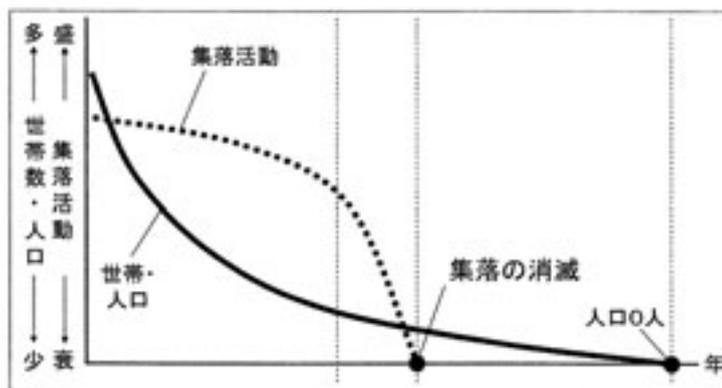


出典：益田市よりデータ提供を受け作成（2010年8月末現在）

図4は、集落限界化のプロセスについて、人口と集落機能の関係を示したものである（笠松，2006:96頁）。以下では、笠松，2006をもとに集落限界化のプロセスについて説明する（笠松，2006:93-97頁）。人口減少の初期段階では、集落機能はほぼそのまま維持される。そのまま人口減少が進むと、集落機能はゆるやかに衰退し始める。具体的には、集落の役職の統合・廃止、常会（自治会の定期会議）の回数減少、地域行事（村の祭りや運動会等）への参加回数の減少または内容の簡略化等の変化が起こり始める。一方で、葬儀、共同の草刈りや溝そうじ等、生活面での共同作業については維持される。しかし、ある段階（臨界点）になると、集落機能は急速に脆弱化していき、やがて、すべての集落機能が停止する。そして、集落には高齢者ばかりが数名残る程度となる。

ただし、集落機能が停止したからといっても、そこには人々の生がまだ残っている。集落機能の消滅と無住化にはタイムラグがある。この点は非常に重要な指摘である。

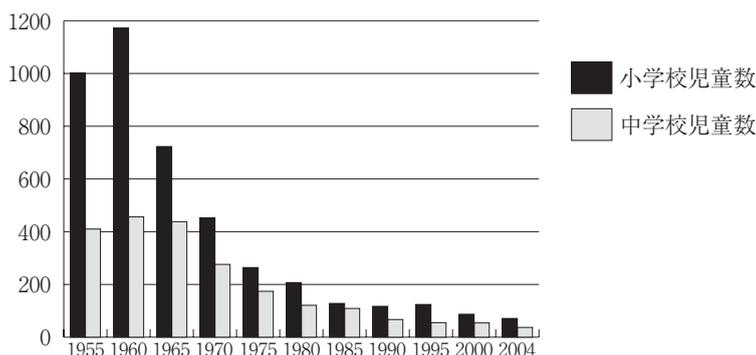
図4 集落消滅のモデル図



出典：笠松, 2006:96頁

過疎・高齢化の進む地域の現状を別の指標から検討しよう。人口減少と高齢化にともない、小・中学校の生徒数も減少している。図5は児童・生徒数の推移を示したものである。三村が合併した1955年当時、小学校10校37学級1,002名、中学校3校13学級410名が学んでいた。その後、1961年をピークに、小・中学校の統廃合が進み、児童・生徒数は減少していく。1988年には、鳥根県立益田農林高等学校匹見分校が閉校し、匹見町から唯一の高校がなくなった。現在、匹見小学校、道川小学校、匹見中学校の3校となり、児童・生徒数は小学生50名（9学級）、中学生22名（4学級）である（2010年4月末現在、鳥根県教育委員会調べ）。これは三村合併時のおよそ20分の1である。

図5 匹見町の児童・生徒数の推移



出典：匹見町誌編纂委員会編, 2007:337頁をもとに作成

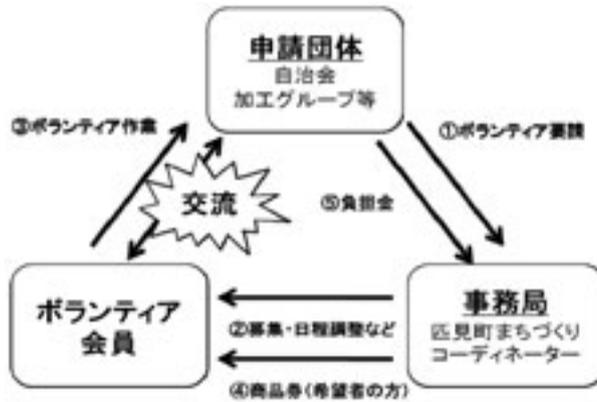
(2)ひきみボランティア制度の流れ

集落の小規模・高齢化にともない集落内の草刈りや清掃、雪かき等の社会的共同機能が衰退している。中山間地域における社会的共同機能の衰退は、そこに暮らす人々の「生」と直結する問題である。

そこで、「次の世代に作業を頼みたくとも、町内に若者が見当たらない。町内に若者が

いないのであれば、町外に住む方に担い手となってもらい、お手伝いしてもらおう。ボランティアをするなかで、匹見の豊かな自然や暮らしに触れてもらい、匹見を好きになってもらう。交流人口が増えれば、温泉施設等の利用促進にもなるのではないか⁵⁾ という発想のもと、ボランティア制度が構想されていく。地域の社会的共同活動の支援と都市住民の田舎で農作業をしたいというニーズの接点で、ボランティアを切り口に事業化を試みている⁶⁾。このようにしてボランティア支援事業は、「中山間地域リーディング事業」により派遣されていた鳥根県職員・島田満氏と匹見支所担当者を中心に構築されていき、そして、2008年3月に設立されたひきみ田舎体験推進協議会に事務局が置かれ、同4月より着任した、匹見町まちづくりコーディネーターの石橋留美子氏が担当者となり、「ひきみボランティア制度」がスタートする。

図6 ひきみボランティア制度の流れ



出典：「ひきみボランティア制度を活用してみませんか？」（2009年12月1日収集資料）

図6はボランティア制度の流れを示したものである。まず、自治会等各種団体内で、いつ、何の作業にボランティアを依頼するか話し合う。次に、所定の申請書にボランティアを必要とする作業内容等を記入し、申請する①。次に、ひきみ田舎体験推進協議会と匹見総合支所による審査会が開かれ、ボランティア会員へ募集がかけられる②。

他方、ボランティア参加希望者は、事前に「ひきみボランティア会員」に登録しておく必要がある。登録者にはメール（メーリングリスト「匹見ワゴン」）で、ボランティア情報が送られてくる。そのなかから興味があるものを見つけ、ひきみ田舎体験推進協議会事務局に参加を申し込むという流れである③。

ボランティア作業要請の受付やボランティアの募集、作業当日までのボランティア会員と地元との調整はすべて、担当者である石橋氏が行っている⁷⁾。

作業自体は基本的には無償ボランティアである。しかしながら、地理的条件等を考慮し、ボランティア会員のうち希望者へのみ、実施した作業時間に応じての滞在費（食事や宿泊）一部助成として、匹見町内で使用できる商品券（美濃商工会発行）を渡している④。例えば、作業時間4時間以上で日帰りでは2,000円、4時間以上で宿泊を伴う場合には5,000円分の商品券が支給される。5,000円という価格は、匹見町内にある農家民泊の宿泊料と同

額である。

ボランティア会員に渡す商品券の一部（1割～2割）は受け入れ側の負担である。したがって、ボランティア会員1人あたり100円～最大1000円を負担している計算になる⑤。

なお、ひきみボランティア制度では、作業支援とともに地域の住民とボランティアとの「交流」に重きが置かれている。ボランティア参加者を単なるマンパワーではなく、匹見町の大切なファンであると位置付けようとしている点が特徴である。

石橋氏は受け入れ団体に、常に、「可能なかぎり作業だけでなくボランティア会員との交流の時間を設けてください。目的は作業支援をつうじた交流です」とお願いしたうえでボランティア依頼を申請してもらっているという。したがって、例えば、草刈り作業の休憩時間に一緒にアイスを食べながら話をしたり、作業をした後、昼食を兼ねた交流会を開いたりする等、地域の住民とボランティア会員が楽しく会話できるような時間が工夫されている。交流の時間は、「匹見に若者が入ることで地域の皆を元気にしたい、ボランティア会員にはボランティア活動をつうじて匹見に興味を持ってもらい、定住も視野に入れて匹見を第二の故郷にしてほしい」という石橋氏の思いをかたちにした時間である。

(3)ボランティアの実施内容と会員

表2 ボランティア会員登録者数と実施内容（2008～2010年度途中）

年度	合計	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2008 (54名)	申請団体 6団体 ボランティア 22名参加				7/5-6 草刈り 10名 (3集落)	8/21,26 ブルーベリー 収穫作業 6名 (2団体)				12/10 とちの実 交流会 6名 (匹見下 公民館)			
2009 (80名)	9団体 54名参加		5/3-4 春まつり 支援 11名 (2団体)	6/2 草刈り 3名 (1団体)	7/5,12 草刈り14名 (3集落)	8/1-27 ブルーベリー 収穫作業 20名 (1団体)				12/9 とちの実 交流会 5名 (匹見下 公民館)			3/27 イベント 支援 1名 (1団体)
2010 (104名)	11団体 50名参加	4/23 環境整備 3名 (1集落)	5/3-4 春まつり 支援8名 (2団体)	6/4,20 環境整備 草刈り 5名 (1集落 1団体)	7/4,18 草刈り9名 (3集落)	8/2-25 ブルーベリー 収穫作業 19名 (1団体)	*2010年度は8月30日現在のもの *年度内のカッコ内はボランティア登録数						
					8/17-18 田舎体験 旅行支援 19名 (1団体)	8/17-18 そば打ち 体験旅行 支援4名 (1団体)							

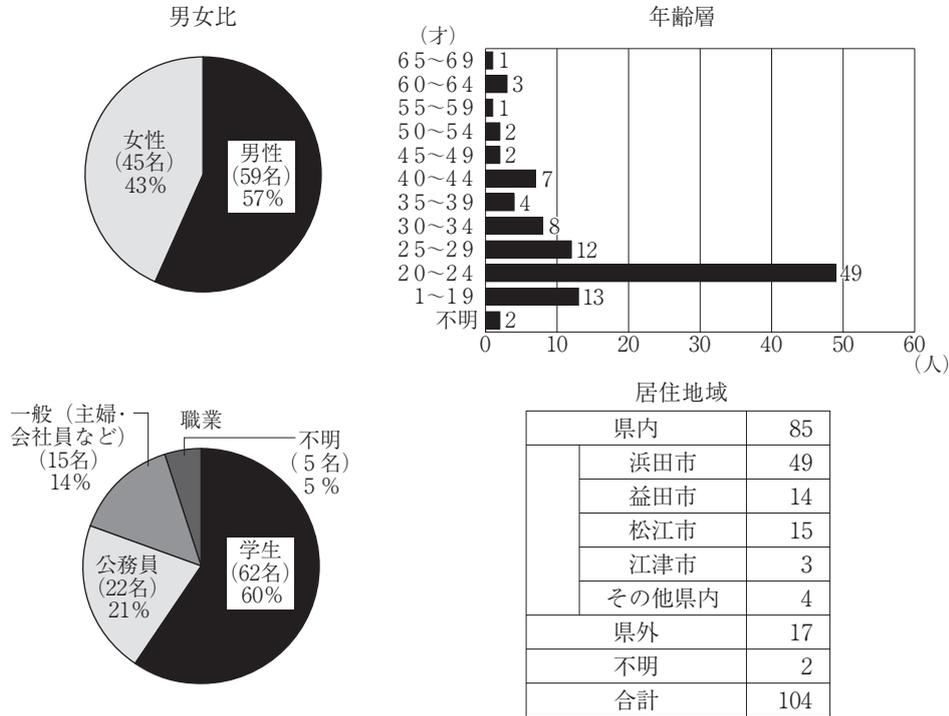
出典：石橋氏への聞き取り、匹見支所での資料収集をもとに作成

表2は、ボランティア会員登録者数と実施内容を年度ごとにまとめたものである。制度運用がスタートした2008年度末には54名であったが、2010年8月末現在では、104名がボランティア会員に登録している。

ボランティア実施内容も年々多様化し、依頼数も増加している。草刈りや農作業の手伝

い、イベントの運営、加工品の製造販売等の作業に、これまで延べ238名が参加している。図6からは、春から夏にかけての草刈りや環境整備、ブルーベリーの摘み取りにおいてボランティアの需要が高いことがわかる。

図7 ボランティア会員の内訳（会員登録時のデータに基づく）



出典：石橋氏への聞き取り、匹見支所での資料収集（2010年8月30日）をもとに作成

図7はボランティア会員の内訳をまとめたものである（2010年8月30日現在）。男女比は男性がやや多く、年齢層は、20～24歳が49名と一番多い。職業は、60パーセントが学生、21パーセントが行政職員であり、主婦・会社員等が14パーセントと続いている。62名の学生のうち、43名が島根県立大学、9名が島根大学と多くが県内の学生が占める。その他、東京や近畿、岡山の大学生が登録している。

居住地域については、8割以上が県内で、浜田市が49名と一番多い。石橋氏は、「大学での講義や視察等、目的をもって匹見町を訪れる方に積極的に声かけ」しつつ、ボランティアを募っており、その後、ボランティア活動をした学生が、友達を連れて再びボランティアに参加する、活動の様子が口コミで広まり、興味をもつ人が参加する等、実際に活動した人を起点に情報と経験が伝達し、新しい会員の登録を呼び込んでいる。

その他、島根に帰省する時にあわせてボランティアに参加するという県外在住者もいる。県外在住者17名はそれぞれ、茨城県、兵庫県、福岡県、東京都2名、大阪府2名、愛媛県2名、山口県2名、岡山県3名、広島県3名である。

県内各地、そして県外にも広がるボランティア会員であるが、益田市からの登録者が少

ないことが気にかかる。今後は、元匹見町民や益田市民へも積極的に周知し、近隣地域の住民による支えあい機能の強化が望まれる⁸⁾。

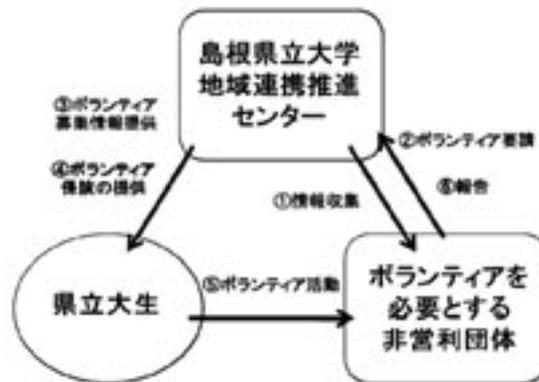
2. 島根県立大学との連携

43名の島根県立大学生と3名の教職員がボランティア会員に登録しており、全体の44パーセントを、島根県立大学関係者が占めている。この数値は、地域への人材供給拠点としての大学の意義を示すものであり、地域連携・地域貢献を大学憲章に掲げる島根県立大学としても、今後ますます重要性を増してくる点である。今回とり上げるのは、短期間のボランティア支援が中心であるが、地域でのボランティアを経験した学生が、地域に貢献する人材として育っていくという意味では、中・長期的にも重要な点である。

以下では、島根県立大学地域連携推進センター（以下、地連センター）スタッフへの聞き取り（2010年5月31日 藤原秀樹氏、竹根美雪氏）をもとに地連センターによるボランティアコーディネートの仕組みの概要を示す。

大学に対する地域からの要望や相談の窓口となり、地域と大学を結びつける役割を、地連センターは担っている。具体的には、学生や教職員の地域貢献活動支援や広報を行なうほか、公開講座の実施等をつうじて生涯学習機会を提供している⁹⁾。2010年度より、地域貢献活動支援の一環として、ボランティア情報の収集・提供や島根県立大生のボランティア活動支援を実施している。

図8 地連センターのボランティア活動支援の流れ



出典：地連センタースタッフへの聞き取りをもとに作成

図8は、地連センターによるボランティア活動支援の流れを示したものである。まず、地域にボランティアを必要としている非営利団体がどのくらいあるのかを知るために、インターネット上で、あるいは社会福祉協議会や教育委員会等に足を運び、情報収集を行なっているほか、浜田市世界こども美術館等の施設に、学生ボランティアを導入した活動の実施を提案している①。

地域の各種団体・機関からボランティア要請があると②、学生ボランティアの募集条件が明確であることを確認し、県大生へボランティア募集の告知をかける③。広報手段としては、(1)学内メール「SUN」、(2)学内の掲示板、(3)ボランティア活動保険登録者への一斉

送信メールの3種類があり、このいずれかを見てボランティア活動に興味を持った学生は、地連センターに参加申し込みをする。

ボランティアに参加する学生には全員、ボランティア活動保険（社会福祉協議会）への加入を勧めている④。保険加入申し込み、保険料支払いは地連センターが代行している。保険期間は、加入日の翌日（夕方に申請したら翌々日）から翌年の3月末までで、期間中にボランティア活動を複数回行ったとしても、加入は1回で済む¹⁰⁾。

地連センターは、希望学生を取りまとめ、要請団体に連絡をする。その後は学生に引き渡し、活動当日まで、要請団体との連絡や調整、段取りは学生が行なう。学生のコミュニケーション力の鍛錬、土日等緊急時の連絡体制等を勘案してのものである。あくまでも地連センターの役割は、要請団体と学生の「出会いの部分」を支援することに絞っているためであるという。したがって、活動当日も地連センター職員が同行することはなく、学生は各自で要請団体先に向かい、活動を行う⑤。要請団体は活動後「活動報告書」と「活動写真データ」を提出する⑥。

ひきみ田舎体験推進協議会は地連センターとも連携している。ひきみボランティア会員への呼びかけとともに、地連センターでも呼びかけてもらう等、これまでに地連センターをつうじて4名の学生が参加している¹¹⁾。

しかしながら、「出会いの支援」に特化している地連センターでは手が回らない部分がある。匹見町までの移動手段をどうするか、活動先との間に問題が発生した時に、現場でどう対処するか等の問題がある。施設へのボランティア支援ではなく、地域へのボランティア支援を考えた時には、学生と地域をコーディネートする人物が必要であると考えられる。

鳥根県立大学では、(独) 科学技術振興機構社会技術研究開発センターの研究開発事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷』づくり」において、2009年9月より、「地域コーディネーター」を採用し、学生と地域をコーディネートする役割を担う社会実験を行なっている（藤本、2010b:71-72頁）。

次節で検討する事例はすべて、地域コーディネーターが、ボランティア参加者側のリーダーとして、石橋氏との連絡・調整や地連センターの呼びかけにより集まった学生の移動支援等を行ないつつ、地域でのボランティア活動を実施した事例である。

3. 匹見町ボランティア実践のケーススタディ

本節では、匹見町ボランティア支援事業におけるいくつかの特徴的な事例をとり上げ、個々の事例について詳細に検討したい。ボランティア支援事業は、一年の流れのなかで、自然や風土と関連して発生する。草が生い茂る春～夏にかけては草刈りや春祭り、夏には収穫を迎えるブルーベリー摘み取りや夏祭り、夏休みを利用した子供たちのイベント、秋には収穫があり、冬には雪が降り積もる。季節、時期に応じた生活のなかに、支援が必要なものが立ち現れてくる。したがって、本稿でも季節に沿って事例をとり上げていくことにしたい。

とり上げる事例は、次の6点より考察され、記述される。①ボランティア活動実施に至った背景や必要性、②活動の目的、③活動の目標、④当日の活動、⑤その後、⑥振り返ってみて当日の活動の何がポイントだったのか。

- (1)【集落支援、作業支援】道川地区元組自治会における環境整備活動（2010年4月23日、6月20日）

表3 道川地区元組自治会における環境整備活動の概要

	4月23日	6月20日
一日の流れ	08:45 道の駅匹見峡集合 08:55 「きばらしの家」(道川元組集会所) 到着 09:10 清掃作業開始 11:45 昼食 13:15 清掃作業再開 —コーヒー休憩 15:30 解散	08:30 道川元組集会所集合 08:45 側溝清掃作業開始 11:00 片付け、交流会準備 11:30 交流会開始 14:00 解散
主催者	元組自治会	
参加者	元組自治会の皆さん	
ボランティア	橋本を含む3名(社会人:男1/女1、学生:男1)	橋本を含む4名(社会人:男1/女1、学生:女2)

(4月23日)

- ① 国道191号沿いに位置する元組自治会は、全12世帯のうち、80歳以上の独居世帯が3世帯ある。さらに集落人口19人のうちの42%が80歳以上である(2010年8月現在)。以上を背景として、「高齢者のための交流の場をつくろう」という目的で、道川公民館館長の三好成子さんを中心とする元組自治会内の女性の方々が、「きばらしの家」という交流サロンを開設している(2009年7月より)。
- ② この度、高齢者の方々がもっと楽しめるよう「きばらしの家」の敷地内にグラウンドゴルフ場を作ろうということになった。そのために、土壌の整備や草刈りの必要が出てきた。しかし、作業をできる若者がいない、ということでボランティアが募集され、ボランティア3名が参加した。
- ③ 「きばらしの家」のある元組集会所は小学校跡であり、国道に沿って歴史を物語る石垣が組まれている。「この貴重な石垣も再び目に触れることができるようにしたい」という自治会の方々の思いがあり、この思いを受け、ボランティアは石垣の雑草や雑木を除去する作業を行った。

④-1. 清掃作業開始

長い間手入れされていなかったため、石垣には多くの雑草が生えており、石と石の隙間からは何本も木の枝がのびていた。ボランティア3名は分担して各所で、雑草の除去作業に取りかかった。

2. 昼食

昼食時には、「きばらしの家」を支えている自治会の方々による手作り弁当と、朝、三好さんが手打ちしたそばがふるまわれ、ボランティアは元組自治会の皆さんと一緒にいただいた。集会所内には、ここに小学校が在籍した当時の写真が飾られており、自治会の方々は食事をしながら昔の元組自治会の様子、元組小学校の歴史や思い出な

どをボランティアに語っていた。

3. 清掃作業再開

昼食後も2時間ほど作業を続け、ボランティア作業は終了した。きれいになった石垣を見た三好さんは大変喜び、地域の方々からは「また元組から（ボランティアの）要請がきたら参加してくださいね」との言葉をいただいた。

- ⑤ その後、元組自治会の方々に評判がよく、6月の環境整備活動にも呼んでもらえるようになった。
- ⑥ 地域の方々の、元組自治会や集会所にまつわる思いを伺い、心に留めながら作業することで、単なる清掃作業ではなく、心を込めた作業となった。

（6月20日）

- ① 4月のボランティアの折に、一生懸命作業している様子や町外のボランティアと元組の住民との交流が非常に良かったとの手応えをもった三好さんは、再びボランティアに来てもらおう、との結論にいたる。
- ② 元組自治会では、集落全体で奥匹見峡の側溝清掃作業を行っているが、高齢化が進み作業を行うことが難しい人も増えてきたこともあり、ボランティアと一緒に作業してもらおうと考えた。そこで、ボランティアの募集がかかり、4名が参加した。
- ③ 全員で奥匹見峡周辺をきれいにすること。
- ④-1. 側溝清掃作業

奥匹見峡近辺の側溝には、落ち葉がたまっており、川水が流れていない状況であった。落ち葉を取り除く作業を繰り返した。何度も何度もスコップでごみをすくう。濡れた落ち葉は量がかさむととても重かった。力がある作業であったが、ボランティアの女子学生2名も黙々と作業を続ける。

すると、「少しは休みんさい」と集落の方に声をかけられ、座ってみんなで休憩した。「暑いねえ」、「つらくないかい」、「どこから来たの」と、集落の方々がいろいろ話しかけてくださり、大学生の2人も楽しそうに話していた。

2. 交流会

清掃作業後、自治会の方々と交流会が開かれた。ボランティアが全員に紹介され、自治会の方々に自己紹介を兼ねて挨拶を行なった。その後、集落の方々と一緒に焼き肉をした。一人で暮らしている年配の方々も多く、「みんなで集まって食べるのは久しぶり、楽しいねえ」と、本当に嬉しそうであった。ある広島在住の男性は、「今回の作業に合わせて実家に帰ってきた」と言う。「若い人と話すのは久しぶりだ」と楽しそうにお酒を飲む方もいた。交流会は盛り上がり、何時間たっても笑いが絶えなかった。

- ⑤ 今後も引き続き、秋の自治会活動にもボランティアを呼ぶことを検討しているようだ。
- ⑥ 作業をしている時は主に自治会の女性方としか話ができなかったが、交流会では男性陣とも話すことができ、交流会をつうじていろいろな話を聞くことができた。

(2) 【田舎体験支援、団体支援】 匹見峡春まつり (2010年 5月 3日)

表 4 匹見峡春まつりの概要

一日の流れ	<萩の会>
	07:30 匹見総合支所集合
	08:00 ブルーベリー餅づくり (萩原集会所)
	10:30 匹見峡春まつり会場に移動 —会場で販売の手伝い
	15:00 片付け開始 15:30 解散
主催者	(株)萩の会、JA西いわみ農青連匹見支部
参加者	春まつりに訪れた方々 (株)萩の会スタッフ、JA西いわみ農青連匹見支部スタッフの皆さん
ボランティア	藤本・橋本を含む6名 (社会人：男3/女1、学生：男1/女1)

- ① 匹見町では、毎年5月の連休に「匹見峡春まつり」が行なわれている。和太鼓演奏や石見神楽上演が行なわれ、地元の各団体がテントを出し飲食店や商品の販売をする等、地域を挙げた催しとなっている。
- ② 春まつりには毎年、(株)萩の会 (以下、萩の会)、JA西いわみ農青連匹見支部も出店してきたが、人出が足りないため、2009年に引き続きボランティアが要請され、6名が応援に駆けつけた。
- ③ 目的は、地元のスタッフの方々と春まつりで商品を作り、販売すること、そして、県外から来たお客さんにも匹見を十分に感じて、楽しんでもらうことである。
- ④ 筆者 (橋本) は萩の会のボランティアに参加した。まず、萩原集会所で萩の会の皆さんと一緒にブルーベリー餅を作る。餅の中に地元産ブルーベリーを練りこんだブルーベリー餅は、とても人気のある商品である。つきたての餅を丸め、容器に詰めていく。熱い餅を形よく丸めるのはなかなか難しかった。すると、萩の会のおかあさんたちが丁寧に丸め方を教えてくれ、最後には、おかあさんたちと同じように丸い餅を作ることができた。その他、餅と一緒に販売するお弁当の盛りつけもお手伝いし、春まつり会場のテントへ移動する。会場に着くと、すでにたくさんのお客さんが来場していた。萩の会でもさっそく販売を開始する。最初は客足が悪かったものの、お昼の時間になるとだんだん人が集まるようになり、朝作ったお弁当やブルーベリー餅が売れていった。ボランティアが途切れないお客さんに一所懸命販売している様子を見て、萩の会の方々も「若い人が一緒に売ってくると助かるねえ」と喜んでくれた。
他方、筆者 (藤本) はJA西いわみ農青連匹見支部のテントに参加し、匹見牛の丸焼きや販売のお手伝いをした。地元匹見にある牧場の牛肉がブロックで出品されていることもあり、春まつりの目玉として、県外 (とくに山口) からもお客さんが来ていた。炎天下のなか20分ほど並んでようやく購入できる、という混みようであったが、何度も何度も並ぶ方がいたのが印象的であった。
- ⑤ また来年の春まつりも手伝ってほしい、8月のブルーベリーの摘み取りにも来てほし

- い（萩の会）、と声がかかった。
- ⑥ 春まつりでは、製造や販売をとおして実に様々な方と話すことができた。しかし、時にはお店が忙しすぎて地域の方々との交流を楽しむ余裕がなかった。

(3) 【田舎体験支援】「田中学習会」田舎体験学習旅行（2010年8月17～18日）

表5 「田中学習会」田舎体験学習旅行の概要

一日の流れ	1日目 10:00 開会式 ・そば打ち体験 ・集会所にて勉強 ・迷路 ・ヤマメつかみどり (宿泊)	2日目 ・集会所にて勉強 ・縄文体験 ・ブルーベリーの摘み取り 15:30 解散
主催者	ひきみ田舎体験推進協議会、匹見川源流道川そば打ち同好会	
参加者	71名（小学校児童65名、講師6名）	
ボランティア	橋本を含む3名（社会人：女2、学生：女1）	

- ① 広島にある学習塾「田中学習会」の経営者（益田市出身）に、「匹見町で田舎体験をしないか」と石橋氏と益田市職員、市議会議員が「営業をかけに行った」（2008年7月）。その結果、2009年9月、「お試し」として、1泊2日の田舎体験旅行が開催された。その時には、生徒14名が参加し、縄文体験やワサビ料理作り等を行なった。
- ② お試しツアーが好評だったこともあり、「今年は子どもたちの自主学習時間も盛り込んで、田舎体験をさせたい。再度ツアーを受け入れてくれないか」、と依頼があった。田中学習会内でツアーの告知をしたところ、応募が殺到し、定員の50名を超え、結局70名近い参加者となった。都会では得られない体験やコミュニケーション能力を高める機会として企画が設計されることとなった。しかし、地元スタッフだけで、70名近くの体験を補助するのは難しい。そこで、補助的なスタッフとしてボランティア3名が参加した。このうち筆者（橋本）は、ボランティアをオーガナイズすることも含め、企画全体の運営支援をするため、ひきみ田舎体験推進協議会のインターンとして、16日から前入りし、準備を行なった（合計で3日間インターンとして参加した）。この点は、(5)ボランティアからインターンへとも関連する内容である。
- ③ ボランティアに与えられた目的は、子どもたちが事故なく田舎体験ができるよう、サポートすることであった。
- ④ ツアーでは、矢じりを作る縄文体験やヤマメのつかみどり、ブルーベリーの摘み取り、そば打ち体験等、多くのメニューが盛り込まれ、ひきみ田舎体験推進協議会の各団体に割り振られて実施された¹²⁾。

ボランティアは、子どもたちに寄りそい、わからない作業が出てくる度に、丁寧に教えていた。また、縄文体験やヤマメのつかみどりは川の近くで行ったため、誤って

川に落ちないように、あたりを注意深く見渡す役目を行なった。

子どもたちは、普段経験したことがないことばかりに直面するので、はじめは面喰らっていた様子であったが、次第に慣れてくると、夢中になって作業していた。「初めてそばを作った。こねるのが難しかった」、「猪の肉はやわらかくておいしかった」、「弓がなかなか的に当たらないが、それもおもしろかった」と、子どもたちは初めての体験を楽しんだ様子を、口々にボランティアに語っていた。

「普段いるところと比べたら匹見のようなへんぴなところは外国に来たようなもんかもしれない。子どもたちがどんな反応をするか楽しみだ、たくさん遊んで、匹見の思い出を作ってもらいたい、思い出をたくさん作って、帰った後家族の人と話してほしい」と語り、子どもたちの体験を受け入れた地元の方々は、熱心に子どもたちへ教えていた。このように、技や知恵を受け継ぐ機会をいかにつくるかは重要な視点である（藤本, 2010 d）。

- ⑤ ツアー中は大きな事故が起こることもなく、無事に全行程を終えることが出来た。子どもたちも匹見を十分に満喫して帰っていったように感じられた。
- ⑥ 子どもたちと共に、地元の方と関わったり、田舎体験を行なったりするなかで、改めて匹見の魅力を再発見することとなった。例えば、「新鮮野菜の天ぷら、そばといった地元でとれた食材を中心に作られた料理は、好き嫌が多い子どもでもたくさん食べてしまうほどおいしい」ということや、「あまり川や山で遊んだことがない子どもも夢中になってしまう自然の遊び場が匹見には多くある」等である。これらは筆者（橋本）にとって新しい発見であった。

また、地元住民と一緒にしてもてなす側に回ったり、いつもとは違う立場で地元住民と関わることで、いつも以上に会話が弾んだように思われる。「子どもたちが来たら、笑顔で一緒に迎えよう」や「あそこにやり方がわからない子がいるから、教えてあげて」等、指示をされることもあり、共通のゲストをもてなそうとすることで一体感が生まれていたように思われる。ボランティアで参加した学生も、「地域の方々と交流してパワーをもらった。新鮮な野菜もたくさん食べることができて充実していた」、「子どもたちが（田舎体験をとおして）どんな反応をするのか、地域の方々と一緒に見るのがおもしろかった」と楽しそうに話した。

(4) 【集落支援、イベント支援】内谷集落・「とちの実交流会」（2009年12月9日）

表6 内谷集落・「とちの実交流会」の概要

一日の流れ	09:00 匹見総合支所集合 —匹見小学校へ移動
	10:00 開会式
	10:30 とち餅作り —とちの実の皮むき —餅つき
	12:30 昼食会
	13:30 和太鼓体験
	15:00 閉会式
	15:30 コウヤマキ見学
	16:00 解散
	主催者
参加者	匹見小学校児童7名（6年生）
ボランティア	藤本・平石を含む6名（社会人：男4/女2）

- ① 「伝統を次の世代に伝えていきたい」（村上さん）、という目的で、内谷集落では、2000年から毎年、匹見の小学生を招いて「とちの実交流会」が行われている。地元の加工グループ「内谷とちの実会」（以下、とちの実会）と小学校の児童が一緒になり、とちの実の皮剥きや、餅つきを行なう。地域の駐在さんにとっても「年中行事」となっており、「毎年参加しているよ」と話していた。現在、内谷集落には中学生以下の子どもがいない。そのため、この日が年に1度の子どもに会えるチャンスであり、とちの実会のメンバーは「とってもこの日を楽しみにしていた」と話してくれた。
- ② イベント運営を支援するため、ボランティア6名が参加した。
- ③ ボランティアと参加児童7名（小学校6年生）は、廃校になった石谷小学校跡の体育館で、とちの実の皮剥き作業、餅つき、餅をまるめる作業を、とちの実会メンバー、地元住民、ボランティア、駐在さんと一緒におこなった。
- 餅つきの場面では、児童が小さな身体で大きなキネを持ち、恐る恐る振りかざす。反対に地元の男性陣は、慣れた手つきでキネを振り下ろし、規則正しく餅をついていた。
- ボランティア（平石）も餅つきを手伝ったところ、餅をひっくり返す人の手を打ちそうになったり、石臼の角を叩きそうになったりと散々であった。都会では滅多に行われなくなった餅つき体験は、ボランティアにとっても貴重な体験となった。
- とちの実会メンバーや、駐在さん、ボランティア、そして何より児童の頑張りによって、白餅・よもぎ餅・とち餅と3種類のお餅が完成した。「できたての味はふかふかしていて格別」、とボランティアの一人が話してくれた。午後には匹見町出身の和太鼓奏者と共に、子どもたちは和太鼓演奏を体験した。ボランティアも和太鼓演奏に参加し、「エイ、ヤー」と声を張り上げ、太鼓を打った。
- ④ 子どもたちは純粋で人懐っこく、ボランティア、地域の方々は皆、笑顔の絶えない一

日を過ごすことができた。「また匹見町に帰ってきたい」(平石)と思わせるイベントであった。

- ⑤ その後も、内谷集落の方々に顔を覚えていただいております、別のイベント等でお会いしても、「あの時、とち餅ついていた子だね」、と声をかけられるようになった。
- ⑥ ボランティア参加者のなかには、山口県在住だが、母親が匹見町出身で、今日は仕事を休んで参加したという20代の女性や、島根県職員で現在は松江在住だが、県職員で、益田勤務時代に溪流釣り等趣味で匹見を訪れており、「その恩返しをしたい」ということで仕事を休んで参加した、という40代男性の参加があった。このような匹見という土地・地域と何らかの縁がある方々がボランティアになっていると考えられる。

(5)ボランティアからインターンへ

筆者(橋本)が匹見と関わり始めたのも、本稿で紹介したボランティア支援制度を利用してのものであった。2010年4月以降、ボランティアの要請がある度に、可能な限り足を運び、汗を流してきた。その過程で、現地での調整・コーディネートをこなしている事務局の石橋氏に多大な負担がかかっていると感じはじめ、イベントやボランティアの受け入れ準備からお手伝いできないか、と願い出て、ひきみ田舎体験推進協議会において短期間のインターン参加を行なうこととなった(2010年6月4～6日、8月16～18日)。

石橋氏は、ボランティア作業要請の受付やボランティア会員への告知、募集をはじめ、作業当日までボランティア会員と地元との調整等、ひきみボランティア制度の仕事すべてを請け負っている。

くわえて、活動対象は匹見町全域であるため、西へ東へと車を走らせている。地元からボランティアの要請を受けると、審査会を経て広報用の文章を作成し、メーリングリストやブログをつうじてボランティア会員に情報を送る。ボランティアがなかなか集まらない時には馴染みのボランティア会員に電話をかけ、誰か紹介してくれないか相談することもあると言う。

ここまで準備が整ったら、活動してくれるボランティア会員が匹見で快適に過ごすことができるよう、保険・宿泊先の手配や作業場所への送迎等、ボランティア会員一人ひとりと密に連絡をとり、個別に対応した手厚いケアを行なっていることを目の当たりにした。

町内住民と町外ボランティアのつなぎ役になるためには多くの関係者とのコミュニケーション、段取り・調整が必要で、石橋氏の携帯にはひっきりなしに電話がかかり、休む暇もないという様子であった。これらにくわえて、当然、事務的な仕事もある。

3日間のインターンでは、役割分担・作業分担が十分にできたわけではないが、日頃からボランティア参加していたこともあり、地域住民の方々に顔を覚えてもらっている等、普段の関わりにもとづいた仕事が出来た部分もある。今回はイベントの運営支援にあわせた短期的な参加であったにもかかわらず、「ありがとう、本当にすごく助かった」、と石橋氏は話してくれた。

地域でのボランティア活動にはコーディネーターの存在が不可欠であることを先に述べたが、ボランティア制度を継続的に運営していくためには、調整役の人員確保も重要な課題である¹³⁾。ボランティア参加の経験や交流をベースに、短・中期のインターンとして参加し、地域とボランティアとの調整役となってみる、というのも発展的なボランティア参

加と考えていけないか、今後検討してみたい¹⁴⁾。

(6)地域の期待・ボランティアの期待

以上のように、2008年度より始まったボランティア活動をつうじた交流・支援の取り組みが少しずつ地域に蓄積されてきている。

ボランティアからは、「地域の人と触れ合いたい、交流したい」、「匹見町というのがどういうところか知ってみたかった」という目的でボランティアに参加したという声が聞かれた。また、匹見町でのボランティアを終えての感想を尋ねたところ、「作業は大変であったが充実した活動であった。普段関わることのない匹見の方と色々な話が出来て楽しかった。また機会があれば参加したい」、「匹見の方は優しくて、また皆さんに会いたい」、「また匹見町へお手伝いに来たい」、「匹見の人たちはあったかい心でもてなしてくれた。優しく接してくれた。草刈りは大変だったが、その後のバーベキューが美味しかった」と充実感を込めて話していた。

他方、ボランティアで出会った匹見町住民からは、「匹見町がどんなところか知ってほしい。匹見を語れるようになってほしい」、「匹見にはこんなところがあって、こんな人がいたなあ、と忘れないでいてほしい」という期待が聞かれた。匹見にやってくる人々は、「ボランティア」をきっかけとした「新しい関わり」をつうじて匹見の大地やそこに暮らす人々と出会い、リピーターになり、さらにインターンとして手伝いにくる、という関わりにまで発展している事を、本稿では明らかにした。このような「新しい関わり」が週末滞在や二地域居住、ひいては定住促進といった動きに発展する可能性もある。

4. むすびにかえて——自立志向・未来志向の中山間地域をめざして

静岡市の中山間地域（梅ヶ島大代地区）との関わりを続けている哲学者・竹之内裕文は、地域住民の学生への期待という点について、次のように所感をまとめている（竹之内、2008:57頁）。

「地区の住民は、これまでの発言を聞くかぎり、学生たちの訪問をまるで『自分たちの息子たち、娘たちが来てくれた』ように喜んでくれる。また彼（女）らは、学生や教員たちが将来的にこの地区から離れていくことをけっして否定しない。むしろその場合に、『この土地で学んだことを思い起こし、自分たちの生活の場で活かしてほしい』と考えている。つまり、土地の人々の所願は、『こういう土地にこんなふうに住んでいる人間がいることを知ってほしい』ということにある。なかには『大代地区のような過疎の農村が変われば、日本の農業が変わる』という大望を抱いている人もいる。このように地域の住民は、必ずしも、経済的な活性化や集落機能の向上にのみ関心をむけているわけではない。むしろ地域の人たちは、『自分たちの生活にふれ、農村のおかれた現状を知ってほしい。そのなかで打開策を一緒に考え、共に生きていってほしい』という切なる願いをもっているといってよい。」

中山間地域は閉鎖的であるという印象があるが、竹之内氏が活動する地区の住民の語りからは、閉鎖的・抑圧的な考えは聞かれない。むしろ、外部に開かれたなかで自分たちの地域のあり方を模索しているようにも思われる。事実、大代地区ではこの夏、「ホームカミングデー、みんなで帰ろう梅ヶ島」というイベントが静岡大学生との協働で開催された。

その企画書には、地元住民や出身者だけでなく、「大代を愛し、ご縁のある方々」にも参加を呼び掛け「土地に縁のある人が生まれ育った場所、愛着のある場所に一斉に集う記念日にしたい」との思いがつつられている（藤本, 2010 e）。

筆者（藤本）が足を運んだ際にも、「おう、よく来たな、一年ぶりくらいか。楽しんで行きなよ！」と満面の笑みで迎えていただいた。イベントでは、全長234メートルの流しそうめん大会（上から下までそうめんが流れ着く時間は4分15秒！）や、静岡大学生による梅ヶ島クイズ大会等が行なわれた。イベントは20名の静岡大学生が下支えし、同地区に世帯を構える13軒すべての家族・親族、そしてその友人が参加した。その他、静岡大学教員や東京在住の筆者（藤本）、地元の駐在さんや地元テレビ局のクルー等、「大代を愛する」参加者は、100名を越えた。地縁・血縁がなくとも、地域に関心をもち、気にかけて、足を運び、共に汗を流し言葉を交わす人々の姿がある。政治学者の斎藤純一は、従来の家族を中心とした親密圏に対し、「具体的な他者の生／生命——とくにその不安や困難——に対する関心／配慮を媒体とする、ある程度持続的な関係性」（斎藤, 2003:213頁）にもとづく「新しい親密圏」を構想する。外部に開かれたかたちで「新しい親密圏」を構築することで、地域に暮らす個人々の具体的な生を支える。そして、気候や風土等、地域の自然環境との持続的な関わりをもつなかでエネルギーや食料をある程度自給することによる自立志向・未来志向の中山間地域のあり方を考えていきたい。

注

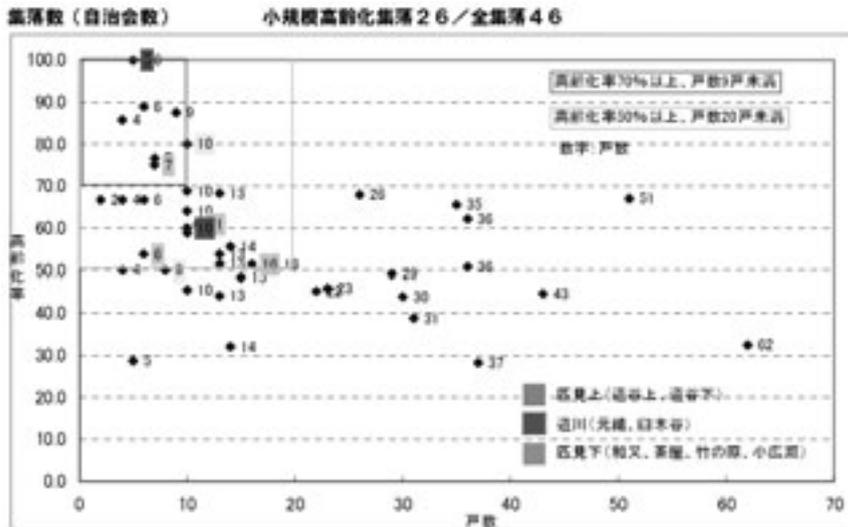
- 1) 本稿を査読していただいた笠松浩樹氏（島根県中山間地域研究センター専門研究員）より、「匹見にやってくる人々が求めているものは、『ボランティア』より『交流』ではないかと感じます」というコメントをいただいた。石橋氏も、単なる作業支援やお手伝いとしての「ボランティア」ではなく、「交流」の意味合いが強く打ち出されるようにボランティアを要請する地域住民にお願いし、またボランティア参加者にも「交流」であることを説明している。滞在費の一部助成として、希望者に地域振興券が発券されることも、無償ではなく有償ボランティアであると考えられる。

本稿では、匹見で生じている「新しい関わり」の現実と実態について詳述し、記録するとともに、その仕組みを明らかにする事を目的とする。現在、「ボランティア支援事業」として展開している仕組みであることから、本稿では、匹見で生じている「関わり」を「ボランティア」ととらえ議論を構築していきたい。

匹見で生まれている「新しい関わり」の「質」が、「ボランティア」を志向したものなのか、「交流」を志向したものなのかについての分析・考察は、別の機会に譲りたい。

- 2) 匹見町まちづくりコーディネーターについては、藤本, 2010 a、2010 cに詳しい。
- 3) 地域コーディネーターとして、2009年9月～2010年3月までを平石純一氏が、2010年4月より橋本が、それぞれ任に就いている。匹見での調査は、2009年12月より藤本（～現在）と平石氏（～2010年3月まで）が、2010年4月より、橋本が調査に参画している。
- 4) 図9は、2009年11月のデータをもとに石橋氏が整理したものである（石橋, 2010: 7頁）。一年と経たないデータであるが、全体的に、左側（戸数減）かつ上側（高齢化率アップ）へと移動している傾向がうかがえる。集落の小規模高齢化は、急速な速度で進んでいる。

図9 匹見町の集落の状況（2009年11月時）



出典：石橋, 2010: 7 頁.

- 5) 2009年12月1日、島田満氏と石橋氏への聞き取りによる。
- 6) エコ・ツーリズムの一種である「ボランティア・ツーリズム」（敷田, 2010）と呼ばれる新しいツーリズムスタイルであるとも考えられる。
- 7) 石橋氏が開設しているブログ「匹見町へ行こう！」でもボランティア情報を紹介している。
<http://blog.livedoor.jp/hikimityou/>を参照。
- 8) ただし、本来の目的として、ひきみボランティア制度は、「町外の方との交流」を中心テーマに設計されている。したがって基本的に、町内の人は登録しないことになっている。つまり、町内の人は有志で参加すればいいという見解に基づいて制度が運用されている。元匹見町民で住民登録が町外の人は登録可能で、現在は1名の町民（登録時は町外在住）が登録している。
- 9) 島根県立大学ホームページ <http://www.u-shimane.ac.jp/13cooperationcenter/index.html>：2010年8月16日アクセス
- 10) 但し、有償活動（交通費、昼食代、原材料費など実費の支給）や免責活動（山岳救助、害獣駆除、野焼き、チェーンソー使用、スポーツ競技参加）はボランティア活動保険の適用外である。
- 11) 4名はそれぞれ、2010年4月23日1人、6月20日2人、8月（ブルーベリー摘み取り）1人である。なお、ここでは、地連センターの広報を見て、地連センターに申し込みをした人のみを抽出しており、地連センターの広報を見ても、石橋氏に直接申し込みをした参加者等は除いてある。
- 12) ひきみ町田舎体験推進協議会の加盟数と体験メニューの種類については、藤本, 2010a:60-61頁を参照のこと。
- 13) この点については、農業経済学者の小田切徳美も同様の指摘を行っており、今後十分に検討していかなければならない課題である（小田切, 2009:53-55頁）。
- 14) 地域とボランティアを調整する短期インターンとして、「田舎で働き隊！（農林水産省）」等の希望者が活用できないかと考えている。「田舎で働き隊！」は2008年度より派遣が始まっている。図10は田舎で働き隊！の概要を示したものである。制度が始まった2008年度には、69の仲介機関（NPO:33、企業等:22）から、のべ2,479人が農山漁村へ派遣され、20歳代973人（43.1%）、30歳代481人（21.2%）/2,260人と若者が多い。そのうち、学生・その他853人（37.7%）、無職（求職者）474人（20.9%）/2,260人となっている（農林水産省ホームページ）。

図10 田舎で働き隊！の概要

事業名	目的と内容	募集人材	期間	賃金・財源等
田舎で働き隊！	<p>農村地域における活性化活動への従事を希望する都市部人材等の活用を主な目的とする人材育成システムの構築をはかる</p> <p>【人材マッチング支援事業】 1. 事業実施主体が農山漁村側の抱える課題について現状分析を行い、必要なニーズを集約する 2. 農山漁村での活躍を希望する人材を都市部を中心として募集し、人材の適性や技能を分析し、必要に応じてスキルアップを図る 3. 農山漁村と人材の相互の希望に基づいたマッチングを行っていく</p> <p>【農村への人材派遣事業】 事業実施主体は仲介した農村に研修生を派遣し、OJT型研修（現地での実践的な研修）として地域資源を活用した事業等への従事を支援する</p>	農村での活動や定住、地域の活性化に関心を持つ者 学生、社会人、求職中の方等、誰でも参加可能	最長9ヶ月間 事業実施主体・研修地域によって異なる	<ul style="list-style-type: none"> ●旅費：150千円/人（1/2補助） ●研修手当：140千円/月（1/2補助） ●コーディネーター団体への助成（例：アミタ持続可能性経済研究所など） ●財源：農林水産省予算

出典：農林水産省ホームページをもとに作成

(<http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/zinzai/gaiyou.html>：2010年7月6日アクセス)

引用・参考文献

- 藤本穰彦, 2010a, 「人的支援を つうじた地域再生施策の展開と可能性 —益田市匹見町を事例として」, 鳥根県立大学JST人材育成グループ編, 『鳥根で暮らす、環境共生という生き方 —地球規模の環境危機へ、地域からのアプローチ』, 山陰中央新報社：57-62頁.
- , 2010 b, 「地域を支える「公共人材」の育成に、地域がとりくむ —浜田市弥栄自治区の実践から」, 鳥根県立大学JST人材育成グループ編, 『鳥根で暮らす、環境共生という生き方 —地球規模の環境危機へ、地域からのアプローチ』, 山陰中央新報社：66-74頁.
- , 2010 c, 「人材配置による集落支援制度の可能性と課題 —モデルとなった鳥根の事例から—」, 『農業と経済 10月号』, 昭和堂：25-34頁.
- , 2010 d, 「中山間地域の担い手問題 —思いや技術継承機会創出を」, 山陰中央新報（2010年5月27日付）.
- , 2010 e, 「土地に根ざした生の継承、新たな共同性の構築へむけて —静岡大学教授 竹之内裕文氏との対話」, 山陰中央新報（2010年7月22日付）.
- 藤本穰彦・田中恭子・平石純一, 2010, 「中山間地域の担い手不在問題 —ボランティア・大学生の可能性」, 鳥根県立大学総合政策学会編, 『総合政策論叢』19：67-81頁.
- 匹見町誌編纂委員会編, 2007, 『匹見町誌—現代編』, 山陰中央新報社.
- 石橋留美子, 2010, 「ツーリズムとボランティアを柱とした地域づくりの取り組み」, （「地域を支える組織づくりと人材 —3つの条件の異なる地域での組織づくりと人材確保の取組の事例報告と意見交換」, 2010年2月20日, 於：鳥根県中山間地域研究センター）, 講演資料（未刊行）.
- 笠松浩樹, 2006, 「中山間地域における限界集落の実態」, 『鳥根県中山間地域研究センター研究報告書』第2号：93-97頁.（初出：2005, 『季刊中国総研』32, 中国地方総合研究センター：21-26頁.
- 小田切徳美, 2009, 『農山村再生 —「限界集落」問題を越えて』, 岩波書店.
- 斎藤純一, 2003, 「親密圏と安全性の政治」, 斎藤純一編, 『親密圏のポリティクス』, ナカニシヤ出版：211-236頁.
- 敷田麻実, 2010, 「援農という希望」, 『東白川都市交流促進事業農的暮らしセミナー実績報告書』：19-24頁.
- 竹之内裕文, 2008, 「生と死の現在 —ある過疎の農村から考える」, 『金城学院大学キリスト教文化研

究所紀要』11：55-80頁。

〔付記〕

匹見町での調査にあたり、匹見町まちづくりコーディネーターの石橋留美子氏と匹見総合支所地域振興課の高橋輝吉氏の協力を得た。さらに、本稿をまとめるにあたり、笠松浩樹氏（島根県中山間地域研究センター専門研究員）と諸岡了介氏（島根大学教育学部准教授）にご助言をいただいた。ここに記して謝辞とさせていただきたい。また本稿は、「人材配置をつうじた中山間地域支援の現状について」（第9回コミュニティ政策学会、2010年7月11日、北海学園大学、第2分科会（3）自由論題）、「人的支援をつうじた地域再生の可能性と課題」（第57回東北社会学会、2010年7月25日、新潟大学、A部会：変容する地域社会）における報告（ともに藤本稔彦による単独報告）と活発な意見交換に大きな影響を受けている。

なお本研究は、（独）科学技術振興機構社会技術研究開発センターの研究開発事業「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷』づくり」（研究代表：藤山浩）と（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）「地域社会にみる死生観の現在に関する複合的研究」（研究代表：諸岡了介）の成果の一部である。

キーワード：集落の小規模・高齢化 ボランティア
ひきみボランティア活動支援事業
匹見町まちづくりコーディネーター
島根県立大学地域連携推進センター 新しい親密圏

(HASHIMOTO Ayako, FUJIMOTO Tokihiko)